

インドで悟った究極の危機管理

国立研究開発法人 科学技術振興機構
インド代表 西川裕治

誕生日前後は危険がいっぱい

筆者が商社に就職したのは1976年だが、それ以降だけでも様々な事件が海外で発生し、多くの日本人駐在員が危険に晒されてきた。例えば85年の「イラン・イラク戦争」での日本人駐在員のテヘラン脱出劇で、命からがらトルコ航空に救出された商社マンもいる。96年12月(長男の誕生日)に起きた「ペルー日本大使公邸人質事件」では自社関係者4人が人質となり、当時広報課長だった筆者は全員が解放される翌年4月下旬まで、朝から晩まで情報収集とマスコミ対応に追われた。

個人的にもいくつかのテロ事件を身近に体験した。ジャカルタ駐在中の86年5月(筆者の誕生日)には事務所に隣接するホテルの一室から日本赤軍派メンバーが日本大使館に向けてロケット弾を発射し、ガス爆発を想像させる大爆音を聞いた。

92年4月にコロンボに赴任したが、その1カ月前、筆者が住む予定の社宅付近で爆弾テロがあり窓ガラスが吹き飛んだ。92年11月(妻の誕生日2日前)には事務所近くを走行中の海軍副司令官が自爆テロで暗殺され、強烈な爆発音と衝撃波を体感した。93年5月、事務所近くをメーデー行進中のプレマダーサ大統領が自爆テロで暗殺された。この時は事前に事件発生を察知し、家族を連れて遠くのビーチホテルに避難していた。

その後も近所でテロ事件は頻発し、95年10月(次男の誕生日3日後)には市内の石油貯蔵施設が爆破され、炎上するタンクから立ち上る黒煙でコロンボの空は真っ黒に覆われた。なぜか家族の

誕生日の前後は危険日なのだ。それを機に事務所を閉め、12月31日にコロンボを出て帰国したが、1カ月後の1月31日、事務所ビルの隣にあった中央銀行ビルが爆破され約100人が死亡した。筆者は間一髪、難を逃れたが、爆弾テロで始まり爆弾テロで終わったコロンボ駐在であった。

なんでもありのインド・リスク

さて、インドでの安全管理上のリスクは大きく以下の5種類に分類される。①国境・宗教・階級差・格差紛争、強盗・窃盗・婦女暴行・誘拐などの事件。②デング熱・狂犬病・肝炎・腸チフス・破傷風などの病気。③飛行機事故(当時の筆者直属の上司他も遭遇)や、ルール・信号無視の運転慣習に起因する交通事故の可能性。④同国お役所の徹底したレッドテープ(お役所仕事)や玉虫色に変化する法律、賄賂の慣習、日本とは大きく異なる労働慣行、頻繁な転職、聞きづらいインド英語などに起因する過大な精神的ストレス。⑤北京と世界No.1を競うデリーの劣悪な大気汚染、等々で叩けばホコリはいくらでも出てくる。

近年では2006年ムンバイ列車爆破事件、08年ムンバイ同時多発テロ、12年ブネ爆破テロ事件、13年バンガロールテロ事件、ブッダガヤ爆弾テロ事件などがある。外務省海外安全ホームページでも「15年6月のマニプール州チャンダルにおける軍の車列に対する待ち伏せ攻撃、同年7月のパンジャブ州ガーダスプールの警察署等襲撃事件、16年1月のパンジャブ州パタンコートにおける空